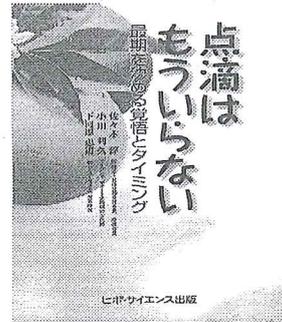


点滴はもういない



佐々木淳、小川利久、  
下河原忠道 著  
ピポ・サイエンス出版  
1500円（税別）

看取りをテーマに、在宅  
医と特養施設長、サ高住経  
営者の3人がそれぞれの実  
践体験を披露する。自宅や  
「第2の自宅」の施設、集  
合住宅で亡くなることを目  
指す。書名のように、点滴  
などで延命治療を施す病院  
に行かないことか思いを共  
有する。

「第2の自宅」の施設、集  
合住宅で亡くなることを目  
指す。書名のように、点滴  
などで延命治療を施す病院  
に行かないことか思いを共  
有する。

病院で亡くなる人が8割  
近い日本。欧米では5割弱  
に過ぎない中で異常なほど  
に病院依存が進んできた。  
老衰なのに病气と判断し、  
延命治療への道を進んでし  
まう。だが、本書で医師の  
佐々木淳さんは「治療でき  
るのは『治療可能な病气』

0人、訪問診療の診療所

書評

## 特養とサ高住の看取りモデル提示

年間400人の看取りをしに家族同士が悩みを語り合ってきた。両方での体験から「看取り援助家族座談会」も開く。家族との情報共有を積極的に進めてきた歩みはまさに特養の教科書といえるだろう。時代の先取りそのものだ。

サ高住を東京で2棟立ち上げた下河原さんも、小川さんと同様に異業種から飛び込んだ。勉強のため視察した病院で、ベッド上の経営栄養の現場を見ながら事務長が「水栽培」と形容する言葉に衝撃を受けた。

その言葉を反面教師として在宅死に関わり、「花が枯れるように」亡くなることを目指す。医療や福祉の業界外からの視点で、自然で非人間的なケアや不本意な死のあり方に気付きやすいようだ。特養とサ高住の将来モデルになる好著である。

評・浅川澄一  
ジャーナリスト  
元日本経済新聞 編集委員  
援助勉強会」の開催、さら